

早稲田大学を卒業後結婚。ご主人の仕事の関係で海外生活の経験をもつ。ご主人が再就職し、日本を離れ海外生活。現在はスロバキアの田舎町でご夫婦とワンちゃんと一緒に暮らしている。

「今のニッポンを斬る！考える！～日本の失ったもの～」

私は還暦をスロバキアの人口2万2千の雪の積もった田舎町で迎えた。この60年、私にとって順風満帆な年月ではなかった。特に50歳半ば、バブルの影響をまともに受けてしまった日々は、思い出すのもつらいことである。今もそれが癒えたわけではなく、不安を抱えながらの日々であるが、この何も無いが自然一杯の田舎町で日本の喧騒から離れ静かに暮らせることを日々感謝している。

今から四年半前、私たちは仕事でフランスのアルザス地方に暮らすため、一匹の犬と共に日本を離れ、二年のアルザス生活の後、ここスロバキアに移ってきた。かつて私はオランダ、ベルギーで生活したことがあったが、それから20年以上の年月が流れているのにヨーロッパはほとんど変わっていないように思えた。その間に日本は信じられないぐらいの変貌をとげたというのに。もちろん細部にわたってみれば、ヨーロッパも治安が悪くなったとか、都市部の自然が破壊されたとか、流通が良くなり物が豊富になったとか、大都市の周りに新しい建物が多くなったとか変化はあった。が、ヨーロッパ生活が始まり、昔と変わらないという感じを持つのはなぜなのかと考えた時、それはヨーロッパは変化が遅く、時の流れがゆったりとしているからではないかと思いあたった。

アルザスはフランスでは遅れた地域であり、スロバキアは昔の社会主義の国でもっと遅れていると言われているからそう感じるのかと思ったが、それだけでは無いような気がしている。日本の生活を当たり前とっていた私にとって、最初は『あれもない、これもない』と不便に思うことばかりであったが、そのうちにこの変化の遅い、物が少ないがゆったりとした雰囲気は何物にも代えがたい素晴らしい事であることに気がついた。『ない』といっても日本を基準に考えればのことであって、こちらの人はそれで暮らせているのだからどこに基準を置くかによって違ってくるのだ。確かにスロバキア的生活水準は日本と比べようも無いほど低く、車の平均使用年数は13年で旧型の車が堂々と走っているし、わが町にはレストランも数えるほどしかなく、娯楽施設もほとんどない。しかし、『ない』ということは、それを享受してしまえば余計なものがないと考えられるし、豊かさを別の視点から考えられるようになってくる。それはアルザスにもスロバキアにも日本人が失ってしまった人々の心の豊かさがあるということである。犬の散歩に出るとフランスでは『ボンジュール』、スロバキアでは『ドブリデン』と必ず大人も子供も挨拶をしてくる。当地では日本人は私たちが初めてであり、多分見たこともない人種に相当びっくりした事と思うが、なんのわだかまりもなく挨拶をしてくる。挨拶程度のフランス語しか解さない私たちであったが、それでも話しかけられるとなんだかそこの住民と認められたような気がして嬉しくなったし、スロバキアでは挨拶語さえろくにわからなかったけれど、必死に挨拶語だけは覚え、目が合えば必ず口

に出すように心掛けるようになった。挨拶、とても簡単なことなのに今日本ではそれができないそうだ。物騒な世の中になってしまい、知らない人に声をかけられても挨拶をする事を子供に禁じる世の中になってしまった。挨拶が無ければ心の交流は生まれないのではないだろうか。

携帯電話、パソコン、ゲーム機、日本のITの発達は世の中を変えたが、同時に人の心も変えたように思う。ヨーロッパでは携帯電話を除いてそれらを持つ者はまだ少数であり、それらを家庭で持つのは必要無いと考える人が多い。自分にとってそれが本当に必要であるかをよく考えている。『ゆっくり考えてから』がヨーロッパの一般の人の基本であり、それが私には時の流れが止まったようにゆっくりしていると感じられるのだと思う。十年一日、同じ生活を繰り返している彼等を『こんな生活が楽しいの?』と疑問に思っていた私だったが、今では四季折々の変化に富んではいるが文明から取り残されているかのように思える静かな生活をもうしばらく続けたいと思っている。もちろんITの発達によって世界のどこにいても俊治に日本の情報を取れたり、日本と同時にテレビを見ることができるようになったことは海外生活者にとって何よりも嬉しいことである。ITの発達の良い面も数え上げればきりが無いほどで、特にITが福祉の分野で目覚ましい活躍をしているのは高齢者社会を迎える日本にとって必要なことである。大事なのは、自分にとって何が必要であるかを見極めて生活していくことではないだろうか。

今は失ったお金の代わりに、心の豊かさで残りの人生を生きて生きたいと思っている。

大学卒業後、商事会社に勤務。今から2年前、交通事故に遭い、平成15年9月より生活保護を適用され現在に至る。

「社会保障を考える」

二年前に交通事故に遭い、体の自由がきかなくなって、やむなくそれ迄永年勤めてきた職を失った。しかし、身寄りのない者にとっては何かの職を新しくさがして糊口をしのぐより仕方がない。連日職安通いをし、求人誌をめくっては面接に行った。打ちつづく、此の平成大不況の中、五十九という高齡、身体不自由、易々と見つかる筈はありません。それでも、短期日の仕事、一日三時間の仕事、いわゆるアルバイトの口を何とか探して生活をなしてきました。そうしたアルバイトやパートは何の保障もない上に低賃金ですから、全くかつかつの生活です。尚わるいことに、企業の都合からいつ何時馘首されるか知れません。しょっちゅう無職になるわけです。職を失くせば、すぐ次の日から職さがしを始めねばならない。ここ二年の間に何度このような憂き目を見たか知れませんが、今度という今度は、職さがしをする費用がなくなるどころか、その日の食さえままならぬ程に貧窮状態におち込んでしまいました。四十年まえの、仙台に住む友人に手紙して一万円借り、互いに顔も忘れてしまっているような従妹に無心の電話を入れたり、生きた心地もしませんでした。

見るに見かねて、近所の人が、生活保護を申請してみてはとすすめてくれ、民生委員を紹介して下さいました。平成一五年八月

四日、その民生委員に伴われ、役場の福祉課を訪ねました。もう一週間もすれば電気が止められる、水道料金は一年近く滞納していて、いつ止められるか分からない状態である、ガス料金も一年以上払えていない・・・等々を告げて申し込みしました。独り暮らしゆえ、頼る者もないことも言いました。福祉課職員は型通りの質問を終え、本日即お米十キロを届けましようと言った。帰宅して一時間もしない内に、米十キロが届けられた。そして、次は八月八日に県民局の人と役場で会ってほしいと言って帰って行きました。これだけです。電気が止まろうが、水が無かろうが、米十キロ、“はいどうぞ”と言っている。お米を十キロもくださるのは当然ありがたいことではありますが、私は所謂ライフライン、電気ガス水道の使用停止が目睫に迫っていることが一番の心配事でありまして、この件に関する対策には一切触れず、米十キロ、ハイどうぞでした。精米されているとは云え、米そのものを、このまま喰えということか、と苦笑がもれたものでした。

そして、何んとか生き延びて、八月八日、指示通り役場へ赴き、県民局の担当職員と面接しました。いかにも横柄にかまえた県民局員が、眼鏡越しに紋切型の質問を切口上に発しておりました。生命、居所、家族構成、資産の有無等を訊いて、終わりに、現在の所持金はいくらですかとたずねました。私は正直に百五〇円と答えた。職員は、では十二日に県立病院へ行って診断を受けて下さい、と言ってお帰りになった。私は、となり町にある病院へバスで行くとしても往復五百円はかかるが、どうやって行けばいいのだろう。いや、今日明日の生活をどうすればいいのだろうとの

心配不安しか残らなかった。帰りに、この日も同道してくれた民生委員は役場内の休憩所でお茶をご馳走してくれたが、聞いて貰いたい心配事を一所懸命話しているとき、私の肩ごしに、私の背部の人か景色に気をとられ、キョロキョロとあっちや向うを忙しく眺めまわしていた。後で分ったことだけれど、この民生委員も、役場の職員や県民局の担当に自分の顔を見せ、点数稼ぎに汲々としているにすぎなかった。果して、十二日の病院行きに車で送ってもらえればと電話すれば、見え透いた白々しい理由でもって断った。病院へ約三〇キロ、事故の後遺症と心臓疾患に襲われ乍らも、私は徒歩で辿りついた。胃潰瘍が相当に悪いことと、事故後遺症についてはリハビリ治療を受けるよう、診断結果を聞かされ、再び三〇キロの道程を家路についた。ポケットに百五〇円入っていた。

八月十五日、激しく玄関を叩く音に表へ出てみれば、県民局員が調査に来たそうである。家の中、あちこち歩きまわってしかつめらしくノートに書き込んでいた。十二日に病院へ行ったか、と訊ねもした。片道三〇キロ、百五〇円で運賃が足りたかどうかなど、勿論ききはしなかった。百五〇円で今日まで生活をして来られましたか、など訊ねるはずもない。彼らはマニュアル通りに喋り、マニュアル通りに動いているだけなのです。この日の帰り際、職員は“約一ヶ月後に決定が下ります”と告げた。あの時の百五〇円で、まだこの先一ヶ月の生活がやって行けると思っているのか。いや、何も思っちゃいない、考えてもいない。決まり文句を述べて動きまわり、安定した給料をとっているだけなの

です。

水道を止められ湧き水を飲んで息を繋いでいた五〇男は餓死しました。生保受給中、担当職員の強引な就労説得によって自殺した婦人のことが新聞を賑わしました。決定までの四十日、水と庭草で凌いだのが私の生保の実態です。

大阪市立大学卒業後、電機メーカーに就職。事業部長・経営企画室長・東京支社長・人事部長などを歴任。平成14年に退社され、現在に至る。

「今のニッポンを斬る！考える！～実と虚～」

「私たちは地獄を見ました。追い詰めたのは貴方たち日本企業です。」一九九四年四月、私は売上と生産性を一挙に三倍に高めたという米国のあるパソコンメーカーを訪問した。そこには日本製の量産品に勝る商品特徴として一台ずつユーザーが望む仕様で組立て、それを速く納品するために手当も無しに深夜業に励み、さらには品質と生産効率の向上をめざして日本仕込みのカイゼン活動を進めるワーカーの真摯な姿があった。一人ひとりが使命感に燃えて仕事に向かっている様子に感動を覚え「なぜここまで出来るのか」と問いかける私に、工場長はおもむろに語りだしたのだった。日本の輸出攻勢で工場の維持が難しくなって一時は閉鎖を考えたが、生活を守ろうとする従業員の必死の働きでようやく目途が立ってきたところだという。

当時米国では強い商品競争力を生みだす日本のビジネスモデルが注目され、日本企業は「キャッシュより競争力を支える人的資源を大切にしている」「株主は短期の益出しではなく、長期の視点で企業力を評価している」「米国企業の多くは過度に分権化を進めてしまった結果、経営上層部は事業の実態から遠ざかってしまった。日本のトップは現場をよく知っている」と賞賛されていた。

それから十年、なぜかわが国は自らの“強み”をまるで弱点で

あるかの如く錯覚して逆に蛇を切り続けた結果、いまや「日本の競争力が十六位から十一位に戻った(ダボス会議報告)」ことを喜ぶ体たらくである。あれだけの大打撃を受けた太平洋戦争ですら、十二年後には復興を果たして国連に加盟したことを考えると、九一年のバブル崩壊から十二年に及ぶ今回の低迷は余りにも長い。しかも未だそこから脱出する明確な青写真が無く、かつての米国企業に比べ危機意識も希薄である。

我々は過去において幾度も経済の大きな軋みを経験し、それらを乗り越えてきた。例えば七三年の石油ショックは、急増した核家族を対象に、半導体による商品の省電力化・多機能化を取り入れた新しいライフスタイルを定着させることによって、米国の二分の一以下というエネルギー低消費体質を確立してこれを克服した。八五年のプラザ合意による打撃は、わずか一年足らずで約六〇%の円高をもたらす凄まじさであった。これを企業は生産性と資材調達を海外に移す一方で、液晶や折りよく市場開放された電話機といった新しい事業分野にシフトして空洞化した国内工場を埋め、八七年には実質成長率を五・四%に戻すことに成功している。いずれも消費生活や産業構造そのものを変える実のある対策が功を奏した。今回は何かがおかしい。

会社を辞して最近是国内を旅行する機会が多いが、ときに「道路は実に立派であるが行きかう車はまばら。途中のドライブインは閉鎖され、目的地の施設は閑散としている」といった経験をすることがある。古人は「桃李下自ずから蹊を成す」と教えた。道は手段に過ぎない。需要を喚起するには、まず目的地に花を咲か

せ、おいしい果実を実らせることに力を入れなければならない。もともと我々日本人は現場を大切に現実に目標を設定することに長けていた。ところがそれを達成するための手段として造った筈の様々な仕組みが、時間の経過と共に現実から遊離し、「手段そのものを目的と考える虚の論理と虚の構造」となって肥大化してしまった。虚の論理に馴染めば、使命感の箍がゆるむ。改革を要する虚構は、官のみならず民にも存在する。「ユーザーに価値を提供する」という本来の企業目的を忘れ、額に汗を流して利益を生み出す人材より「利益が出る筈だという虚の論理」を器用に作り上げる人物と組織を評価して業績を落とした事例は幾らでもある。

わが国の経済を再建するのにいま必要なことは、多額の公共投資といった一時しのぎではなく「国民の生活を守り、産業競争力を強化する」という国政の原点に立ち返ってグランドデザインを描き、本音で語り合って国民的総意を醸成することではないだろうか。そしてその価値観に照らして、官民すべての組織・運用システムを再点検すべきである。例えば効力を失った公共投資や補助金を減税に回して需要喚起の原動力を民に託せば、行政の簡素化と経費削減、それに何よりも税の再配分システムから生じた虚の権力構造を浄化することができる。

かつて恵まれない環境下で地道に経済力の強化に努めてきた我々の世代から見れば、競争力を構成する人材・技術そして資金力も、今は本当に恵まれているように見える。それなのに冴えない。起爆力が生まれてこない。何事も問題を直視してこそ解決策

が見え、使命感が成功へと導く。虚を排し実を重んじるわが国の強みは、世代を越えて受け継がれなければならない。日本が「葉桜や 昨日は花とはやされて 今日は見返る人もなし」という端唄の一節のようにならないために。

元会社役員。

「今のニッポンを斬る！考える！～涙くんさよなら～」

日本人はいつからこんなに泣くようになったのだろう。田中真紀子、鈴木宗男、辻元清美。山一證券の社長さんもそうだった。徳光さん、あれは別。

春日八郎のヒット曲「別れの一本杉」に 泣けた泣けたこらえきれずに泣けたっけ という文句がある。娘がまだ三歳にもならぬころ、小児病棟に入院したことがあった。完全看護なので面会時間しか会えない。時間がきて帰ろうとすると、じっと見つめる娘の目にみるみるうちに涙が溜まってくる。声はださない。こらえきれずに泣くというのはこういう泣き方なのだと思った。

ほんとうに悲しいときには、幼い子どもだって泣き声は立てないのだ。誰か助けてくれる人がいると思うときに大声で泣く。要するに甘え心があるのですね。言葉を変えて言うと先述の国会議員の先生方や社長さんは、大人じゃないのだ。

一億聡懺悔から一億聡白痴となり今や一億聡甘えんぼになっちゃった。マッカーサーは「日本人は十二歳」と喝破したが、あれはもしかすると「日本人を十二歳にしてやる」ということではなかったのか。

とすれば戦後民主主義教育こそ、日本人を甘ったれにしてしまった元凶といえるのかもしれない。

こらえきれずに泣けたっけの娘は、今看護師として老人介護施

設に勤めている。この施設では週に一回カラオケ大会をやっているのだが、お年寄りたちが歌う曲は圧倒的に小学唱歌や文部省唱歌が多いという。普段は、心高原にあるというようなお年寄りがすばらしい表情をして歌い、それを聴いている人たちも唱和するという。

村の渡しの船頭さんは今年六十のおじいさんの歌を知らなかった娘は、昔は六十歳でもうおじいさんだったのと驚く。昔は人生わずかに五十年、満で数えりゃ四十九歳。高齢者が人口の四分の一を占める今の時代とは平均寿命が違ふと初めて気がついたようだ。

彼女は今の老人介護施設の前は大学付属病院に勤めていた。手術後一番痛がるのは年齢が若くなるのに比例するらしい。感心するのは明治生まれの人だそうで、痛みはありませんかとたずねると、切ったんだから少しは痛いのは当たり前と答えるそうな。術後の苦しいリハビリにも一所懸命取り組むという。彼女にいわせるとどうやら戦後生まれが一番ダメらしい。

今年の春、上の娘が秋田へ嫁にいった。この際先方の実家に泊めてもらい、翌朝裏に出てみると、はるかに奥羽山脈を望む広い広い田圃に霧がかかっている。とたんに ただ一面にたちこめた牧場の朝の霧の海 を口ずさんでいた。ここには日本の原風景がある。こういった風景を大事にしたい。そして都会に住んでいても「牧場の海」のメロディが浮かべばこの景色を思い出すのではないか。

そういえば小学校の音楽の教科書から、文部省唱歌や小学唱歌

が消えたという。「村の鍛冶屋」などもうほとんど存在しないとか、文語体が難しすぎるなどの理由だそうだ。滅び行く文化や伝統を教えるのが教育じゃないんですか。難しかったら教えるのが教育でしょうが。

戦後民主主義教育は、戦前のものをすべて悪とした。泥棒にも三分の理という。世の中どちらかが一方的に悪いなんてことはない。

いいものは残し、悪いものもなぜそれが悪かったのか考えるためにも、少なくとも記録には残しておくことが大事なことはないか。

庭にもひともと棗の木 だって、ここはお国を何百里 だって、これを歌うことによってあの戦争は何であったのかを考えることができる。それがいわゆるひとつの正しい歴史認識へのスタートになる。

そこで提案。小学校の音楽の教科書に文部省唱歌、小学唱歌を復活しよう。そして毎朝授業の始めに歌いましょう。軍歌や歌謡曲にもいい歌がいっぱいあるが、小学校にはいかなものかという大合唱が聞こえそうなので、涙を吞んで割愛する。

その代わりに査問委員会や証人喚問を開催する際、宣誓をする代わりに対象者に是非歌ってもらいたい歌がある。それはこの歌
涙くんさよならさようなら涙くん・・・。

慶應義塾大学経済学部を卒業後、テレビ局のアナウンサーとして活躍、その後、文教大学情報学部教授を勤める。

「今のニッポンを斬る！考える！ ～核ストップに有効な手段を～」

昭和五年の生まれですから翌年が満州事変、敗戦の年が中学三年生で、少年時代を戦時下で過ごした、いわゆる焼け跡闇市派です。その私がこの歳にして言いたいのは、今のニッポンは、戦時に死んだ人たちの言いたかったことであろうことを言っていない、それで済むのか、これがこれから述べる「私の主張」の骨子です。

「なんぼなんでも、ひどいじゃないか、というのが市民運動の原点だ」と言ったのは、私と同世代の小田実さんです。その「なんぼなんでも」を言うこと能わず死んでいった人たちの無念の思いを忘れてはなりません。

先の戦争での日本の戦没兵士の六割、百四十万人もが、餓死、あるいは栄養失調による戦病死だそうです。異郷の地で、餓死、栄養失調死するとは、死んでも死にきれぬ思いだったことでしょう。ましてや広島、長崎の被爆死者の場合、ほとんどが市民で、以下、ここでは、なんぼなんでもひどすぎる核の問題に絞って述べます。

いったい核がいかに残酷な兵器であるか、核保有国の指導者たちは、実感を持ってわかっているのでしょうか。原爆のキノコ雲を書き続けている画家の黒田征太郎さんいわく、「原爆を落とした

側はオフィスで野球ゲームでもしている気分じゃないか」。今こそ核の残酷さを、目に見えるかたちで知らしめて核の使用にストップをかける、これこそは被爆国ニッポン最大の国際貢献でしょう。

目に見えるかたちとは、被爆写真を使うことです。先例があります。

もう五十年も前ですが、全ページを被爆写真に当てた『アサヒグラフ』(昭和二十七年八月六日号)です。編集長は、のち劇作家の飯沢匡さんです。

この企画を立てたのは、「頻りに無辜ヲ殺傷シ」という終戦詔書の文句に衝撃動かされてだったと、のち飯沢さんは言っておられます。

「無辜」とは罪のない民の意味です。およそ戦争の犠牲者というのはその決定に直接関与した者ではない、いわば罪なき民です。その無辜の民の無残な死の写真は衝撃的で、作家の平林たい子さんは「夜、うなされて眠れなかった」と言ったそうです。まもなく、これを世界に送ろうという動きが起き、ペンクラブは英訳文の解説を添えて各国のペンクラブセンターに送り、ユネスコ日本支部は加盟六十三か国へ、二十部ずつ送ったという記録があります。

飯沢さんの次の言葉を改めて噛みしめたいと思います。「このむごたらしさを、余すところなく世界の人びとに見せなければ、無辜の死者は浮かばれない」。黙祷で死者の憤りは鎮まりはしないのです。

写真は理屈を越えて訴えます。真っ先に見せたい人はすぐ近く

の国にいます。

さてこの二年後、二十九年三月、第五福竜丸が南太平洋ビキニ環礁での水爆実験に遭遇し「死の灰」を浴びる事件が起きます。このビキニ水爆は、死者二十五万人の広島原爆の一千倍の殺傷力を持つといわれた。もはやだれもが逃げ場のない状況に立たされていることがはっきりしました。第一回の原水爆禁世界大会が開かれたのは翌三十年です。

この年、訪米した『文藝春秋』編集長、池島信平さんはしばしば「日本人はどうして原水爆にナーバスなのか」との質問を受けたそうです。このとき池島さんの言った言葉も忘れられません。

「この地球上で被爆した生物は、原爆実験場のニューメキシコ州の砂漠の蟻、ビキニ環礁の豚、日本人だけだ。蟻も豚も被爆の苦痛、悲惨を訴えることができない。それを語れるのは日本人だけだからだ」

ここに「無告の民」という言葉があります。私は、『文藝春秋』（昭和四十三年三月号）に載った、松浦総三さんの文章、「書かれざる東京大空襲」で知りました。「無告の民」とは、自分の苦しみを訴えるすべのない民の意味です。東京大空襲は、昭和二十年三月十日、十万人の都民が死にました。一日の空襲死者数では広島に次ぐ大量殺戮です。この「無告」の死者の声を、生き残った者が代わって残そうと「東京空襲・戦災を記録する会」が生まれ、全五巻の戦災記録が刊行されます。私もいささかお手伝いしましたが、あれからすでに四半世紀が経ちます。

先だって、長崎の浦上天主堂の被爆獅子像というのが東京大学

の総合研究博物館で見つかったと新聞が報じていました。獅子の像には数千度の熱を浴びた痕跡があったそうですが、被爆した長崎市民は、その灼熱に生身を曝したのです。この博物館にはまた、広島、長崎の被爆写真百枚余が保管されているというのですが、これは保管ではなく死蔵だと私は思います。

昭和五十七年、長崎原爆資料館を訪れたマザー・テレサさんは言いました。

「すべての核保有国の指導者たちは、ここに来て、この写真を直視すべきだ」と。

さて、写真を送っても見ないかも知れません。だったら二の矢として、核保有国の有力紙の紙面を買って写真を掲載するという方法もあります。掲載料など安いものと思わねばなりません。戦争が、やっている本人自身、相手が死ぬのを見ないで殺すようになった今こそ、自分が押す核のボタンがどんな結果をもたらすかを知らしめねばならない。でないと、無辜の、無告の死者は浮かばれませんし、私たちはこれらの魂に顔向けできません。

東京帝国大学文学部卒業後、海軍兵科の予備学生として、横須賀海兵団に入隊。終戦後、新聞社に入社され、定年後は総合研究開発機構の広報室長を勤めました。昭和60年に退職され、現在に至る。

「社会保障を考える～高齢者介護にロボットを～」

私是一九一九年（大正八）年生まれの、“準独居老人”である。やや血圧が高めの他は、とくに異常もなく、「高圧・高性能人間」だと自負していた。ところが昨年六月初旬、突如脳梗塞に見舞われ、生まれて初めて病院生活を味わった。幸い比較的軽症だったようだが、まだ後遺症のため、杖を離せぬ日々である。

リハビリのために外出すると、杖を頼りの人、車椅子、介助者の肩にすがって一歩行ってはひと息など、どこか障害を持つ人が、あまりにも多いのに驚く。これに寝たきりの人を加えれば、介護の問題がいかに大きいかが痛感される。

いまや日本は、世界一の長寿国。しかも異常ともいえる少子高齢化の進み方から、近い将来、高齢者一人を、二人弱の若い人で支えなければならないとされ、その財政的負担に耐えられるかどうかが大問題である。経費もさることながら、看護・介護に要する人手の確保が、果してどうなるかも深刻な問題である。

ところで私が入院中、最も悩み、つらかったことは、出るものの始末、つまり排泄作用のことだった。すぐそばのトイレに行くのも厳禁。なにから何まで、ナースのお世話にならねばならなかった。「ナースコール」のボタン一押しで、彼女たちは飛んできて、汚れもいとわず、「これが仕事ですから・・・」といつも笑顔で片

付けてくれる。でも、何かいつもつらい気持で、お願いした。自分で何もできないのに、焦り、もだえた。そんな時に思い浮かべた「白日夢」は、「介護作業の機械化・ロボットの導入」であった。

かれこれ二十年ほど以前に、看護や介護の現場を調査し、その現状と、将来を考えて、介護作業は人手から機械に、介助ロボットの開発を と小論を発表したことがあった。

ところが、忽ち、おしかりの手紙や電話が殺到した。曰く、『看護や介護は、女性の優しい手ですべきものである。しかるにそれを冷たい機械に委ねよとは、何たる冷酷、非情な男であることよ・・・』が、そのご趣旨であった。元看護婦長という、年かさのヒステリックな声は、いまでも耳底に鮮やかである。

でも現実の世界では、介護美談をはるかに上回る悲話が、連日のようにニュースを賑わしている。老親の介護のために職を辞した男性、看護疲れからの凶行、 数え切れぬほどの、いたましい、恐ろしい事件は跡を断たない。「どんなに親孝行な娘でも、完全な介護ができるのは、九十日までである 」との学説もある。現実はきびしい 。

長期にわたり温かい介護の実を挙げるためには、私達は、好むと好まざるとにかかわらず機械、ロボット、 それは擬人的なものである必要はない と手を携えなければならないのだ。

最新のME（医用電子工学）の応用によって脳から発する極微の精神電流を検知し、増幅して、パワーエレクトロニクスによって、運動機能を復活させることも、時間の問題である。自律・自助によって「寝たきり」からも解放され、一種の無重量状態を作

り出して。患者の身体を浮上させて、軽々と自由に動かして、清拭するなど、「床ずれなしの介護」も夢でもない。労働力の不足を補い、さらにより高度なコンスタントな完全介護のために機械化は必須である。

これをさらに進め、充実させることは、個人の力では到底不可能である。完備した施設が必要となってゆくからだ。入所者、つまり介護を受ける人のプライバシーのためには個室、相互の親睦のためのロビーが、当節はやりの露天風呂も...となれば、どうしてもホテル級の大きな施設になってしまう。その建設も運営も国・地方自治体、あるいは公共団体の力によるほかはないだろう。このような公共事業なら許されることだろう。失業対策・雇用増にもなるのだから...

もはや在宅看護や介護は限界に達している。この施設では、健康で活気ある高齢者は、「シルバー人材センター」に見る如く、それぞれ得意な分野で生産やリペアの活動をして、本人の収入にも施設の収益にも充てるような活気ある「ユートピア」を創設するのだ。

そのような壮大な夢を描いたものの、いまの滞納に悩む社会保障関係の費用をどうするのが先決問題だとなるだろう。まず、現在論じられている消費税率を上げることも已むを得まい。でもその前に、従前に比して格段に低くなっている高額所得に対する税率を再検討すべきである。

モラルとモラルの高まりだけが、互いに手をさしのべ、握り

合って、助け合う社会保障の明るい将来を約束するのだ。「心に太陽を、唇に唄を」温い相互の理解と思いやり、何ものをも焼きつくすような強烈な信念、そして明るいリズムに乗って、“真の社会保障”が達成されることを、大正デモクラシー、自由主義の世に生を享け、軍国主義の波にもまれ、三年弱の太平洋戦争を体験し、不思議に生命を永らえて、いつしか八十余年を経た一老人は願っている。

東京水産大学を卒業後、えび関係の水産会社で海外生活を20年以上続けリストラに遭い退社。退職後、失業保険受給、タクシー運転手などを経て、現在は横須賀市にある特別養護老人ホーム・デイサービス送迎バスの運転手をしている。

「今のニッポンを斬る！考える！」

私は、三十数年、小さな水産会社に勤めていましたが、50代前半に事業縮小により、肩叩きに近い形で会社を放り出されてしまいました。潮時とも思っていたので、別にショックはなく、再就職についても楽観していました。失業保険を受給しながら、大型二種運転免許、更にボイラー、電気、冷凍機などの免許も取得しました。これで再就職に少しは有利になるかと思ったが、ただ免許を持っているだけでは駄目で、ある程度の経験がないと就職が難しいということがわかってきました。扶養家族もあり、とにかく就職だけはしなくてははいけない。焦りました。求人広告を目を皿のようにして見るが、五〇才を過ぎてからの就職は非常に厳しいという現実にはぶち当たりました。職種、待遇面で選択する余地は全くありません。とにかく雇ってくれるところにもぐりこむしかない。タクシー運転手、ビル管理会社などの仕事に就きました。

今年の九月で六〇才となり、年金の一部が受給できることとなり、早速社会保険事務所に出向き、老齢年金受給の請求手続きをしました。愕然としました。約一年前に同事務所に行って調べてもらった時に、六〇才時の年金額を聞いていて、少ないなあと思っていましたが、それが今年四月の年金改正、いや年金改悪によ

り大幅に年金額が減らされていたのです。年額で四〇余万円減っていました。職員に文句を言ったところ、「あなたより悲惨な人は大勢います。」と、にべもない返事であった。子供三人はそれぞれ職を得て独立し、これからは悠々自適、夫婦二人だけの年金生活の夢は木っ端微塵に打ち砕かれてしまいました。

今は、特別養護老人ホーム・デイサービス利用者送迎バスの運転手の仕事をしています。ここの施設のデイサービスは、介護保険を利用して、介護が必要な老人二〇名前後を施設に呼び、朝の十時から夕方四時まで入浴、食事、体操、ゲームなどでサービスするシステムです。数名の介護士が世話をし、看護師が常に健康面をチェックしています。

介護する家族にとっては非常に便利な制度だと思います。いろんな年寄りがあります。みんなから好かれる人気者、反対に嫌われる人。そういう老人達を見ていて、私も出来れば皆に好かれる年寄りになれたらいいなと思うが、それがなかなか難しい。人間年をとるにつれ、頑固、偏屈、意地悪、意固地、独り善がりになりがちである。まだまだ修業が足りないをつくづく思います。ある利用者について、看護師から興味深い話を聞きました。

その人は目が見えるのであるが、自分では目が見えないと思っている。自分は目が見えないと思うと、本当に何も見えなくなるということです。こうだと自分が思い込むと、本当にそのとおりになってしまうということなのです。ということは、自分は今千円しか持っていないが、これを五千円だと思い込むと、それは千円ではなくなり、本当に五千円になってしまうのです。それで私

は思いつきました。少ない年金をそのようにして四倍も五倍もの価値にして使えるようにするにはこれしかないということなのです。すなわち、物価の安い外国でのロング・ステイです。ロング・ステイとは、移住でも永住でもない海外滞在型余暇であります。かつて、シルバーコロンビア計画が日本政府主導のもとに企画されましたが、日本は車だけでなく、老人まで輸出するのかという国内外からの批判によりその計画は頓挫しました。時を経て、いまや元気で活動的な老人が自由に住みたい国を自分で探し、日本から出て行く時代となりました。日本の寒い冬の間だけ常夏の国で過ごすもよし、その生活スタイルは全く自由です。現在、外国人の退職者をビザの取得などで優遇して積極的に受け入れている国は多くあります。その中から私が選んだ国はフィリピンです。同国は、五万ドル（約五五〇万円）を六ヶ月の定期預金にすれば、年金生活者向け特別居住査証を取得することができます。その定期預金は、六ヶ月以降は土地や建物のリース費用、家の建設費用等に運用することができます。フィリピンの最大のメリットは、常夏である、日本に近い、物価が安いということでしょう。十万円が四〇～五〇万円の価値をもつ。これを最大限利用しない手はないと思います。少しの賃金とちょっとした勇気、行動力があれば、それはすぐにでも実現できるのです。

私と同じような考えを持つ定年退職した先輩たちが、日本から脱出して世界の国々に散って退職生活を謳歌しています。そして、その数は年々確実に増えています。

年輩者に敬意を表さない若者たち、年寄りを大事にしない国・

日本、年金では生活できない国・日本、その日本からの脱出を私も目指しています。

山形県の商業高校を卒業後、銀行に入行。数年のちに退社し、東南アジア、中近東、ヨーロッパ各国を数年にわたり見聞。帰国後は長崎県福江市において農業を営んでいます。

「今のニッポンを斬る！考える！

～どっこい、農業は生きている～」

私は未経験だった農業を未知の土地で始めて三十年になる。そしてそれは日本の高度経済成長、バブル景気、その後の今日に続くデフレへの歩みと一致する。幸か不幸か、それらの変化は、やりたい農業を愚直にやってきた私の傍を通りすぎた。

しかし、目先の少しばかりきいた私の周りの人々は、株に手を出し、土地を買って動きがとれなくなった。農業の分野でも、安易に農地を拡大し、機械化を図ったり、慣れない養殖事業に手を出して破産のうき目にあった人もいる。

古から日本の基本は農であった。工業国へ変化した今でもそれは同じであろう。そして国は膨大な予算を農業の為に毎年つぎ込む。しかしその結果は食糧の自給率40%である。

トウモロコシや小麦、大豆を輸入に頼っている事が一因らしいが、それらを栽培するよりもビニールハウスで季節はずれの野菜を栽培する方が賢いとされる。

更に、人件費の安い外国での野菜が安価を理由に輸入されている。それも多量に。その安全性が絶えず疑問視されているにもかかわらずにである。しかしその点は、日本国内も似たりよったりである。私の周囲でさえ、善良な隣人でさえ、販売用には化学肥

料、農薬を十分に使用し、見ばえの良い作物を栽培し、自家用には無農薬の虫食い状態のものを食すという。私にとっては信じられない事が当たり前のようにまかり通っている。

しかし嘆いてばかりはいられない。うれしい事もある。いわゆるIターン、Uターン、そして定年後の生活の場として、農業を志向する人が増加している事である。かく言う私もその一人なのだが、素人を農村に迎える制度も雰囲気も三十年前とはずい分と変わった。

国が目指しているのは大規模、専業農家の育成のようだが、こうした素人農家の増加は都市から農村への人々の流入としても歓迎すべきであると思う。

私の場合はこうである。東北で育った私は高校卒業すると、東京の銀行に就職した。四年間の在職中、若気のいたりですが、人生は何かを考えるうちに、ブラジルでの集団農場を計画する若いグループに出会い、移住を決意し銀行を退職。しかし移住する前にグループに内紛があり、私はこの機に世界を見てもよようと単身無銭旅行の形で出国する。二十三才。一ドル三六〇円の時代であった。

東南アジア、中近東、ヨーロッパと旅し、ロンドンで職を得て資金を貯めブラジルへ渡る。この間考えた事は、日本という国は捨てたものではない。日本の農業でやれる事があるのではないか、という事だった。

結局、二年半間の外国暮らしの末帰国した私は、働きながら農地探しをする。北海道から九州まで見て回った。資金のない私のポ

イントは人の見捨てた様な不便な土地、過疎の地だった。そしてたどり着いたのが、九州は五島列島、福江島の離島の中の辺地といわれる所で、そこの荒れた農地を求めて私の農業生活は始まったのである。

農業をやるからには自由にやりたかった。その為には借金はない。これは私の大方針だった。農業には土地の購入にしても、機械の購入、更新、更に生活資金にも融資制度がある。また、畜舎などの建築には補助制度があって、自己資金は20%程で済み、あとは県、国の税金で補助してくれる夢のようなものまである。しかし少額とはいえ、借金は借金で、その返済の為にあくせくする事を潔しとしなかった。欲しいものはお金を貯めて買おう。足りない分は自分の力と頭で補おう。それが農業ではないか。そんな思いでいっぱいだった。

田を作り、野菜を植え、牛を飼い、豚を飼う。畜舎には山の木を切り出し、農業機械は中古の耕うん機一台。ポリシーは無農薬栽培。

最近、地産地消と盛んにいわれはじめたが、私は二十年前から朝市を通しての地元農産物を直接消費者の手へという会に参加、世話役している。生産者への呼びかけは、コンテナ（野菜などを入れる籠）一つからの参加。その当時から、いや全国どこでも同じだろうが、農業は農家の奥さん達の働きによる処が大きい。その彼女達の老齡化が始まっていて、その老いた彼女達が手押車で運ぶ野菜を積んだコンテナをいかに活用するかが着目点だった。十個のコンテナが集まれば市が出来る。

こうして始まった日曜朝市は、一時五十人程の会員がいて、会場の場所取りで混雑するほどであった。ここ数年、郊外への大型店の出店や、野菜の無人売場の出現に加え、農業をやめる会員が目立ち、現在は十数人の規模に落ち着いている。しかし、地元の、新鮮な、安全な野菜を作って、どっこい農業は生きているという消費者へのアピールは健在である。

身体の動く限り現役でいこう。皆の合言葉である。

中学卒業後、美容学校に進学。卒業後、美容師として十数年従事したのち、建設会社に転職。定年退職後の平成13年に高等学校に入学、現在高校3年生。

「今のニッポンを斬る！考える！」

桜の花の咲く頃、私は短期大学の一年生になる。現在六十才、高等学校の三年生である。四十三年振りの念願の授業は、私にとって楽しいものであったが、教室では少なからず驚かされた。少数ではあるが朝から机にうつ伏して眠る子、携帯電話でメールを打つ子、後向きで堂々と友と雑談をする子等、少しも悪びれる様子も無く、先生からの注意も殆ど無い。しかし実に皆、素直である。先生の質問にもキチンと返答する。が又、雑談は続く。いつからこの様な風潮になったのだろうか。

私は昭和十八年、元満州国の北安省で生れ、敗戦と共に両親と姉妹の四名で引き揚げて来た。戦後の日本は国民すべてが衣・食・住に困難を極め、毎日の食糧の調達が日々の目的であった。しかし、家族の絆は強く少しの食物でも分かち合い、物質の不足や家計の貧しさは物を大切に作る心を養い、冬は工夫をして暖をとり夏は涼を得る為に知恵を巡らした。家事は年相応の分担をして助け合った。皆が力強く生きた。

その状況の中で私は中学校卒業後の進路を決めるにあたり、両親はいかなる時代にも生き抜く事が出来るように職を身につける事を強く勧めた。私は進学を諦めて美容学校に入学して美容師の道に進んだのである。

十三年間の美容業の後に、事務職に転職、三十年企業に勤務し定年を迎えて宿題であった高等学校に入学、そして来年三月卒業の見込みである。やっと辿り着いた学業の場であった。

昨近、小学校での学級崩壊が叫ばれている。子供のお喋りや歩き回りで授業が成り立たないという。その原因は子供の「わがまま」との意見があるが、本当にそう云えるだろうか。

一つの出来事としては確かに学級崩壊が子供のお喋りや勝手に歩き回る行動に起因している。しかしその根源は学校制度の確固たる信念不足と思えてならない。一つのボタンのかけ違いが今も何か違う、どこか違っていると感じるのである。

ただ、本来家庭で躰けるべき基本的な礼儀や行儀迄学校にまかせる親達、教育はすべて学校がするものと考える傾向は改めなければならない。経済は高度成長を遂げ科学の発達により、家庭電化製品が普及して母親の家事労働が軽減され社会進出が増えた。加えて核家族化や、少子化による家族団欒の場は少なくなり孤食や孤立が生じている。経済の豊かさから欲しい物は必ず手に入る結果が抑制力の欠如となり、小さな「ガマン」も出来ない「わがまま」とつながっている。

しかし、以前の校内暴力やイジメが問われていた頃はどうかであったろう。競争主義による受験戦争のストレスや学力不足で落ちこぼれといわれる生徒達が、学校で暴れた。この問題を解決する為に「ゆとり教育」が生まれた。一人ひとりの個性を大切に、たとえ学力は低くてもそれはその生徒の個性として認めようとした。すべて平等を前提に成績にも運動にも順番をつける事無く、皆一

律で運動会の「かけっこ」ではゴール前で足踏みをして皆が揃ってから手をつないでゴールするのである。

この現在の教育の自主性重視や個性の尊重が一方での集団性や何でも平等の一律性がギャップとなり、子供が教室での歪んだ自己主張となっているのではないだろうか。学校はもっと明確に社会の在り方と価値観を直視して、人としての知識と心を研いて、モラルを習得し他人の痛みや苦しみを理解して思いやる心と互いの存在を認める教育こそ、この国の病んでいる病巣を一掃出来ると思うのである。

教える教育から学ぶ教育の一環としては兵庫県で、県下の中学二年生を対象に実施されている「トライやる・ウィーク」だろう。地域の企業や商店の協力を得て、生徒が数人ずつ五日間の職場体験を行う。ガソリンスタンド、スーパー、商店、建築会社、老人施設等、生徒が自ら選択し体験を通して自分の生き方を考えてほしいとの意図である。

私の在職した工務店にも五名の男子生徒がやって来た。五日間を設計士でもある現場監督と行動を共にした。ある日はヘルメットをかぶり現場の片付けに、ある日は自宅の間取りを図面に興す設計体験を、そして二日間で犬小屋を造った。子供達は煙突迄つけペンキを塗って完成させた。後日学校から子供達の感想文の写しが届いた。面白かった体験とその中の一人が将来設計士になるとの言葉を見つけて、私達一同喜んだのは言う迄もない。

教育の改善は長い目で見て世代の交代によって、家庭での躰、近所、町内そして地域ぐるみの子育てとなり、豊かな心を養い強い精神力と深い知識を持つ社会人を育成出ると信じ又、夢見る私である。

四年制大学を卒業後。都市銀行に入行。銀行を退社後の現在は、会社役員をしている。

「社会保障を考える」

社会保障についてその「制度」を議論し整備することが肝要である事は論を持たないが、それだけでは全く不十分であり、文字通り、「仏作って魂入れず」である。

そもそも社会保障の原点とは「個人の病気、老後などの不安を除くこと、又それが守られるように手段を講じること、畢竟すると社会による弱者の庇護機能」である。弱者が社会によって十分に庇護されている、生きていて良かった、と本人が思える為にあるべき社会の総合的な仕組み気組みである。

この観点から今の日本の社会保障を考えると制度以外に足らざる部分が二つある。一つは公共施設等の物理的インフラの整備である。そして、もう一つ、より重要な要素は、社会全般、就中、地域社会の弱者に対する思いやりの心とその行動の欠如である。

前者については遅々としてではあるが進歩しつつあると思われる。この点、なんと言っても日本は世界に冠たる公共投資大国である。然しながら、後者の点については、現代の日本には、極めて冷たい風潮が蔓延している。己と自分の家族さえ良ければよしとする人間が宗教界を含めて絶対多数である。勿論人間も生物の一人として極限状態にあっては、自己保存本能が最優先となることは当然であるが、一旦世界に目を向ければ、現代日本ではそのような状況は相対的には既に解消されたと考えられているにも拘

らずである。否、それどころかその傾向は一層甚だしいものとなっている。

この状況を考えるとき、北米での生活体験を想起する。ある日系人一家がいた、一家五人であった。カナダ国籍の取得申請をした。一人除いて許可が下りた。その一人とはダウン症の娘であった。カナダの法律では、ダウン症の障害者は国籍取得が出来ないと言われた。彼らの友人知人は無論、それを知った近くに住む人たちは、猛然と抗議活動を行った。話を聞いた若者も汚いジーンズのポケットから一ドル二ドルを引っ張り出した。出身国籍、年齢、性別を問わなかった。抗議は実を結んだ。法律そのものが改正された。

彼らの行動規範は「altruism（他人への思いやり）と率直さ」であり、その点で日本との差異を強く感じる。勿論彼我の文化的歴史的差異は大きく、特に宗教の問題が根底にあることは当然であり且つ全ての現象にはコインの裏側があることを認識した上ではあるがそれでも果たしてそれだけであろうかと考え込んでしまう。端的に言って現代日本ではこのような現象は残念ながら極めて少ないと言わざるを得ない。

それどころか現代日本には「当たり前のことを真面目な顔で正面切って言うことは気恥ずかしい、真面目なことをやると軽蔑される、更には、正義感であることは危険である。」とする風潮がある。この意味では、悲観的ならざるを得ないかもしれない。

では、日本にはこのような発想が元々無かったのかと言うとそんな筈はない。仏教にも捨身飢虎の言葉がある。特に家において

は、両親共にそうであったことは胸に手を当てて考えてみると直ちに理解できる人が多いはずだ。その意味では単に戦後日本は生活の為、金の為とは言いながら、この美点を大きく損なってしまっただけであるとも言える。

そこで我々、中高年の登場である。この風潮を矯め、正しいと考えることを口にし、他人への思いやりを率先して行動に移しうるものは我々中高年しかない。我々中高年はそもそも既に厚顔無恥である。人間は正直でなければならぬと正面切って言っても今更恥ずかしいと感じることはない。弱者に手を差し伸べることに気後れする必要もない。我々中高年は、最小限の国民年金も受け取れる(だろう)。そして、六十そこいらの我々には十分すぎる体力と時間もある。そのため我々中高年はいたずらに被害者面をすることはやめ、正しいことを発言し、車中であっては、女性に席を譲り、あるいは、後から入ってくる人のためにドアを抑えることにしよう。小銭が余ったらパチンコなどせず、寄付をしよう。老いらくの恋も悪くは無いがその精力とエネルギーを自分の欲望と保身に向けるのでは無く、他者、特に弱者の為にこそ使い、以って社会の変革に貢献しよう。そして、政府や官に阿ねたり政府が政府がと思考停止をするのを止め、社会保障を受ける立場ではなく、与える立場になろう。地域中高年の、地域中高年による、地域中高年の為の、社会保障である。さすれば誰にとっても住みよい日本が実現し、本当の社会保障国となりうる。

蛇足であるが、この提言は、爺及び爺化傾向にある一部婆に向けたものであり、一般的にその他多くの老婦人は既に規範となっていることを付言する。

義務教育終了後、紡績工場に入社。退職後はテニスコート勤務を経て、現在はマンションの管理人としてパート勤務。

「今のニッポンを斬る！考える！ ～ローン生活との決別～」

「日本人が壊れてしまった。」

最近の世相を見て私はそう感じている。

政治にも企業にも市民生活の場にも、その現象が見える。自己責任の回避、他人を思いやる心の希薄さ、犠牲的精神の欠除と共に、善悪の判断さえも曖昧となり、損得だけが人の行動基準になっているように思える。犯罪は増加し自殺者も多い。豊かになつたはずの我が国に何が起きているのか。

私達の世代は、敗戦の焦土の中から粒々辛苦の末に今日の物質的繁栄を築いてきた。その道程のどこかにその原因があるに違いない。私達の世代が貧しい生活の中から将来に見据えてきたのは、こんな社会ではなかった。「衣食足りて礼節を知る」社会を夢見たはずだ。その原因を学校教育や家庭に求めることはたやすい。が、おそらくそう単純に原因を特定することは困難であろう。

私は歳を重ねるごとに、今の社会を毒しているもの、日本人を変節させた原因のひとつについて、ある確信を深めるに至っている。それは「ローン」と「クレジット」という横文字で表わされる制度の蔓延である。欲しい物が買えずに「月賦」で買う、あるいは、なじみの店での飲食代を「つけ」にしてもらうという制度

や習慣は昔からあった。しかし、それは少しばかり恥ずかしい購買方法であり行為であった。その習慣に身を委ねた者は、次第に借金がふくらみ、拳げ句の果ては人に迷惑をかけ社会的信用を失うのが大方のなりゆきであった。

「欲しい物があれば金を貯めて、現金で商人の横面を張って安く買え」と先輩に教えられたものだ。自分の持ち物を担保にして借金をする「質屋通い」でさえ、あまり人目に触れたくない行為であった。ところがいつの間にやら月賦が「ローン」になり、つけが「クレジット」と横文字に衣装替えしておかしくなった。物欲を抑制する「がまん」が美德ではなくなり、欲しい物はすぐに手に入れて支払いは後、というのが至極当り前の生活になった。靴や洋服が自動車になりそして家になった。羽振りのいい企業は「従業員持ち家制度」を作ってマイホームを買わせ、銀行は利息を稼ぐために貸しまくって家を買わせた。サラリーマンにとって人生終局の目標とも言われた「家」がいとも簡単に手に入った。目先の家と引き換えに、二十年三十年先までの自分の収入と、場合によっては命までも押さえられてしまったのである。

借金は身を縛る。収入と身分を守るためには、例え無理難題であろうとも社命に従い、ひたすら従順な「社畜」となって企業に寄り沿わざるを得なくなる。家を買った途端に人の嫌がる部署に異動させられたり、僻地に転勤を命じられた、という話は山ほどある。上司の意に逆らわず、社命を天命とあきらめる「社畜」集団が誕生したのである。経済も右肩上がりで、不動産価格も上昇していた時代はそれでもよかった。バブルがはじけ、世の中が正

常な状態になった途端に借金は更に重さを増して肩にのしかかる。我が身を守ることに汲々とし、人の痛みに思いやる心の余裕も消えてしまう。経営者は首切りを「リストラ」と横文字で化粧することによって、経営に対する無能ぶりを隠ぺいし、首切り行為を誇るかのように無責任に居座ろうとする。人々は不条理と闘うことさえあきらめて、ひたすら災難が我が身に振りかからないように息をひそめるしかない。まさに労働組合の出番だと思えるがその気配さえ見えない。

我が身第一、弱肉強食の世相の根底に借金漬けの生活があると思う。人々に借金をさせることによって利を得る者達によって、実に巧妙に甘いワナが仕掛けられてきた。気がつけば、ライフラインから携帯電話に至るまで、日常生活のすべてにわたって後払い制度が仕組みられ、日々その中で生活していると、借金に対する認識も大きく変化してきていると思われる。気軽な借金を原因とする犯罪や自殺者も多く、家庭崩壊の因ともなっているのが昨今の状況である。

普通の生活者が借金をするという行為の重大性と危険性について、義務教育の中に組み入れるべきだと思う。

社会に巣立つ若者達も我が身の身売りに等しいローンやクレジットに頼る生活を避ける覚悟をもってほしい。

私は、義務教育を了えて社会に出てからの半世紀を、満足をもって振り返ることができる。功成り名遂げた訳けでもなく、借金生活のまま今日を迎えている。客観的に見れば、幸福とは逆に映る人生かもしれない。しかし、媚びも売らずへつらいもせず、誠実に正々堂々と生き抜いてきた自分自身に満足している。

早稲田大学卒業後、食品会社に入社。現在は、物流関係の子会社に勤務。

「今のニッポンを斬る！考える！

～漂流する日本農業 誰が次代の農業を担うのか～」

養豚業は三度引っ越す、という話がある。新住民達が「非衛生」だの「臭い」だのと言い立てて豚飼いを追い出し、三度目ともなれば、業者は町から遠い山の中に引っ越す。農家の副業としては成り立ちようもなく、会社でやるにしても、人里離れた豚舎で少ない休日働く社員を確保する事は容易ではない。二〇〇〇年度の豚肉の自給率は五七%、牛肉は僅か三三%、鶏肉は六四%で、昨今、大型倉庫のようなコンクリートの鶏舎で生産されるようになった鶏卵が辛うじて九五%である。

牛乳は一〇〇%とは言え、乳製品合計では七〇%を下まわり、酪農に従事する人の多くが、設備投資に要した借金の返済と後継者難に苦しむ。食用魚介類の自給率も五三%であり、畜産・酪農・水産に携わる人々は、深刻な環境問題、採算性、事業の見通し、後継者難などに悩んでいる。

農業の現場では、少子高齢化と後継者難は更に深刻である。「家」を同じくする、老・壮・青三代が専業者として農業に従事し、大自然と土を相手に食料自給を支える、江戸時代から連綿と続く農業本来の姿は急速に崩れて来た。

三〇余年にわたって「農業生産法人(化)」を主軸に進められてきた農業従事者の近代化、民法と税法とのねじれの是正などは、

それなりの結果を出して来たが、この努力には、あまりにも早い社会の変化によって、農村（集落）と農業人そのものが激しく変貌している事実を吸収する力が無い。

農業年金導入の工夫や納税における青色申告制の採用、また株式会社による農地の保有や耕作の可否を論じている間に、善悪は別として、農業と農家の実態が「あるべき論」を飛び越えて先へ進んでしまった。

人口問題、環境問題と並んで、食料問題は二一世紀の地球レベルでの大問題だと思うが、日本の食料自給率は先進諸国の中で最低の四〇%であり 二〇〇〇年、この事実は今後の政治・経済・外交に測り知れないマイナスの影響を及ぼす。

フランスは一三六%、アメリカは一二七%、ドイツは九七%、イギリスでさえ七一%であり、しかも四カ国とも三〇年前に比べて上がっている。日本だけが二〇%も低下している、というぞつとするような数値である。

国民学校の一年生の時に敗戦を迎え、飢えと食糧難の中で戦後の少年時代を過ごした私としては、見逃す事が出来ない恐ろしいことが今進行中で、「誰が次代の農業を担うのか」という最重要なテーマの具体策を脇に置いたまま、一部の専門家の中だけで、昔乍の（観念的な）議論が続けられているのはいかがなものか。

勿論、若者を含めて、農業を愛し知恵と情熱を傾ける人達は今もいるのだが、全体としては、三世代はおろか二世帯農家も着実に減りつつあり、大型農業機械の運転席によじ登るようにして座り、大根を引き抜くにも息を荒くする年代の人達が主に仕事をし

ているとすれば、田も畠も果樹園も花畑もいずれは荒れ果てる。

農家の跡継ぎ（承継者）だけでなく、自然の中で働きたい若者達を農業に惹きつける、魅力に富んだ制度、仕組みの新設や変更が急務だ。株式会社の参入にしても、悪い面や気がかりな点だけに気を取られて、参入の「入り口」に条件を付けるのではなく、冒険・挑戦・規模の大きさ・自由な発想といった良い方も見つめ、制約条件を付けるなら「出口」(農地の転売、他用途への転用の制限あるいは禁止、荒廃化などへの厳しい罰則など)の方に付けてはどうか。

状況はもうぐずぐずしてはいられない所へ来ている。味噌、醤油、豆腐、納豆などの原料である、食用大豆の自給率さえ二〇%前後で、「米と味噌汁があればそれでいい」と言ったところで、それも輸入抜きには考えられない。実態として激しく変貌しつつある農家の保護だけに偏せず、食品の安全を声高に論ずるだけではなく、国際的な農産物自由化の奔流の中で、わが国の食料の自給を確保する為に知恵を絞り仕組みをつくることは、次世代の命と暮らしに関わる急務である。

あなたには、日本の農業が高齢者と兼業農家によって辛うじて支えられ、頼りなげに漂流しているのが見えませんか。

国立海技大学卒業後、船舶会社に入社され、二等機関士、海務部工務課主任として活躍。その後も船会社のシンガポール駐在員などを勤め、現在もシンガポールにて数社の代表取締役を勤めている。

「社会保障を考える」

私は現在シンガポール共和国に住んでいる。そこで私が常々感じているのは、日本の厚生年金、基礎年金制度とシンガポールの年金制度の違いである。その二つを比較しながら、社会保障のあり方について提言をしたいと思う。

私は福祉とは、一人一人が行政に対する甘えを断ち切るところからしか始まらないという持論を持っている。老後を生きていく為には自己防衛しかないというの実直な感想だ。

現在の日本では年金に対する不信感が強まっている。年金をまったく掛けていない人が増えているのも、年金のどんぶり勘定による不公平感が高まった結果であろうし、掛けた分だけ果たして受給できるのかの不安感からだろう。年金制度は将来的にどうなるのか、財源には消費税率などを上げて税金から補填するのかといった政府の方針は今のところはっきりとは見えてこない。しかし、将来においては受給年金減額、消費税率アップという方向へ進むことはほぼ間違いがないだろう。

一方シンガポールの年金制度は、国民全員が加入するCPF（中央積み立て基金）というものだ。これは個人口座方式になっており、いわば強制的に貯金させられるわけだ。

労使が分担（被雇用者は給料の二〇%、雇用者は一三%）して

払った CPF は利息（市中銀行の利率より良い）と共に定年後に引き出せる仕組みになっている。

CPF は普通口座、医療口座、特別口座の三つのカテゴリーに分かれており、普通口座は五五歳になれば一〇・五%（または八万シンガポールドル＜一シンガポールドルは約六六円＞）を口座に残して、それ以外を引き出すことができる。更に六二歳以後は四万五〇〇〇シンガポールドルを口座に残せばよくなる。

医療口座の場合、三万シンガポールドルを常時入れておかなければならず、死ぬまで引き出すことはできない。通院や入院でこの口座から引き出した場合はすみやかに普通口座から入金する必要がある。3 万シンガポールドルあれば、政府系の病院なら心臓手術や脳外科手術が可能な額なので、病気になっても、行き倒れになっても、他人の迷惑のかからないシステムになっているわけだ。病院側も医療費の未収の心配がないので、安心して治療を施すことができる。最後の特別口座は老後に備える目的の口座で、五五歳以降は残額をゼロにしてよいことになっている。

CPF では月収の三〇%（過去最大時は五〇%）以上を強制的に積み立てるので、二〇年、三〇年では大変な金額になる。しかし自分が掛けた分は、確実に利息と共に戻るなので納得がいく。このようにシンガポールの年金制度は設計されている。

日本の年金制度も行く先はシンガポール型に切り替えられる可能性が有る。

しかしここで一回根本的な部分の意識改革が必要なのではないか。それは行政や身内、地域社会に対して一切甘えない、期待し

ない、あてにしないという心構えを持つことである。

私がこのように考えるようになったのも、シンガポールで会社を立ち上げた経験からである。オイルショック前に猛烈社員、企業戦士などと呼ばれていた時代、私の勤務していた会社は造船企業向けの機器の生産販売を行っていた。当時は、大手、中小造船会社が一丸となって世界の造船量の六〇%以上を建造しており、二〇〇〇年に韓国にその座を明け渡すまで実に四〇年以上に渡って世界一位の座にあったのだ。室蘭から鹿児島まで全国の造船所は、七年先くらいまで注文を抱えていたという今では考えられない時代である。

当時はマリンの銀座といわれたロンドン、ニューヨーク、香港、オスロなどには世界的な大手船会社が軒を連ねており、日本の造船重工会社の駐在員も日夜、飛びまわっていた。

一九七五年に会社から私へシンガポール主席駐在員の辞令が出て赴任。さっそく現法設立にとりかかった。やがて米国への転勤命令が出たのを機に退社、独立して小さいながらも、一国一城の主になって現在に至っている。

会社を運営していく中では、言辞に尽くせない辛酸を舐め、悔しい思いをさせられた。特に、日系銀行にはまったく相手にされず、ずいぶん冷たい仕打ちをくらった。

その中で私は、自己で生きる術を会得し、行政、その他いかなるものに対しても一切甘えず、期待せず、援助を求めない自己を確立したと思っている。

現在の私はかねがね、老後を年間五万円くらいで生活する術は

ないかと模索している。例えばミャンマーの山奥にあるお寺には
いり、雲水生活をすれば衣食住は保証される。そうしたら日用品
の出費だけでもよい生活が可能ではないか。

私は一人きりでも、日本のどの地方でも、また、どこの国でも、
どんな環境でも生きて行く強さを持たなければならないと思っ
ている。制度としての社会保障、福祉を国に求めるだけでなく、
福祉の原点は自分自身にあるのだと痛感し、実践している次第で
ある。

商業校を卒業後、就職。戦争を経て、30数年にわたって郵便局に勤務。銀行の参与を経て現在に至る。

「社会保障を考える」

論語の中に「子貢政を問う、子曰く兵足り食足り民之を信ぜば全からんと、止むを得ざれば兵を去れ食を去れ信なくんば立たずと」

政治の本質を見事に言っている。

現在の日本の状況を見ると、政治は民より信を失って居るのだ。

老人の将来を託する年金にしても、現在支給を受けて居る年金（それは他の国と比較しても多い）が将来もずっと続いて支給されるとは国の経済状態からして思はれず、何時かは行詰ると思はれ、それに対し政治家は増額ばかり主張しそして増やして来たのだが、それでは国民から信用される筈がない。

信なくんば立たず、年金掛金の未払が四割にもなるのは当然の結果だろう。

それではどの様な対策があるのだろうか、そこで私は一つ選択制の相続税なるものを提案したい。

それは相続税に関して現在の様に国が定めた相続税率で相続する者と一方では相続税を一切払はないがその代わりに、自己の老後の面倒を一切相続人に見てもらおう方法と二者選択制とする。

相続税を今まで通りに払う者は年金も老人保険優遇も介護も現在と同じ様に受けられる。一方選択制相続税を申告した者は、自

分の財産を相続税なしに相続人に渡す代りに、老後の介護・年金等の生活一切を相続人に面倒を見てもらうのである。

勿論厚生年金等の掛金に見合う分の年金はもらえるが、国の負担分はないので現在より少額であるし、健康保険は老人優遇措置が適用されないので現職の方と同じ負担となり、介護保険も適用されず、公よりの介護もなく、全部家族でみななければならない。

この様にすれば何十万の老人が選択制を選ぶだろうし、その分だけ他の老人の利用枠が増加するものと思はれる。特別養護老人ホームへの入所も多少楽になるだろう。

そしてこの事が相続人の家族が多少とも外に出て働くよりも自宅で老人の介護をして、相続税なしで相続する方が利益だと考える様になれば、外に出て働く事も少くなり、その分若い人の就職の機会も増加するであろう。

もし老人が相続さす子供・孫等からどんな介護や待遇を受けても、それは自分が選んだ道であり後悔する事はない、自己責任だ。

相続税の年間の税収は一兆円か二兆円とも聞くが老人関係の予算の減少はそれよりずっと多いただろう。公務員も少くてすむのだ。

家族に信を置くか、国に信を置くか、老後の自己責任による選択だ。

又伝統工芸や伝統産業に従事する方々には一子相伝的な秘法があるだろうが、これは各種の相続財産と一体となって居るだろうから、相続税なしの方法を設けるのも伝統・家風の維持に力になるものと思はれる。

封建的だと批判する方は選択せなければよいので、他人が選ん

だ道は人の自由なのだ。

相続税については正に一国二制度である。

然し二つの方法があり各自自分の責任で選ぶのであれば何も心配する事はないのだ。

その結果は自分の責任だから。

又家庭のあり方についても二制度で変化が起るであろうし、自分の老後を託する子供に対しての教育・しつけ等には真剣にあたるだろう。その事が又家族間の連帯感を強めて、社会的に二つの流れのうちの一つとなるのではないだろうか。

相続税を納めずに財産を相続し保有するのは、社会観念の上で不公平だと云う学者もあろうが、スコットランドの詩人バーンズは、近代社会に於て生活する上で、生活安定の為の一定の財産が必要であり、これを彼は独立の巖と名づけた。

何時会社・官庁を退職しても家族が喰べるに困らない丈の最小限の財産は必要だというのだ。

よく組織の中でなぜ不正があったのに申告し摘発しないのかといはれるが、独立の巖をもたない者にとっては空論なのだ。

上部の不正には大抵の部下はそれとなく、変だと気付いて居るのだが、表立って発言した場合の、身に振りかかる人事上の事や、家族の事を思って知らん振りをするのだ。

今は電車の中で暴力行為があっても見て、見ぬふり、後に続く者もないのだが、せめて家族の間にでも信を保ち連帯感を持つ方法も選べる一国二制度の社会保障、つまり国家によるものと、家族によるものとの併行もあってよいのではないだろうか。